

弥勒信仰について

『観弥勒菩薩上生兜率天経』の考察——

木村 宣彰

弥勒が本来に人間世界に出現して説法することは、すでに阿含経（例えば中阿含第十三、増老阿含第四十四など）にも説かれている。さらに大乘の興起とともに種々の弥勒経典が成立するが、そこでも弥勒は、この世で般涅槃すると兜率天に化生し、そこでその寿命を尽して、再びこの閻浮提に下生し、成道すると説かれている。下生した弥勒は婆羅門に生まれるが、無常を観じて出家し、即日に成道して龍華樹の下で三会の説法を行うという。そこで滅後の衆生は、未来の弥勒仏を信じて善根を積み、龍華三会において弥勒に値遇し成仏の記別を受けることを願う信仰が生まれた。中国においては既に四世紀の初（西晋太安二年三〇三）に竺法護によって『弥勒本願経』や『弥勒成仏経』が訳出されている。その後、陸續と翻訳された弥勒経典の中から特に（一）劉宋沮渠京声訳の『観弥勒菩薩上生兜率天経』、（二）西晋竺法護訳の『弥勒下生経』、（三）後秦鳩摩羅什訳の『弥勒下生経』、（四）唐義浄訳の『弥勒下生成仏経』、（五）鳩摩羅什訳の『弥勒大成仏経』、（六）東晋失訳の『弥勒来時経』を「弥勒六部経」と称している。就中（一）『観弥勒菩薩上生兜率天経』（『上生経』）と（三）『弥勒下生経』（『下生経』）と（四）『弥勒大成仏経』（『成仏経』）の「三部経」が弥勒信仰を考察する上で取り分け重要である。これらによれば一生補処の菩薩・弥勒は、この閻浮提から兜率天に上生し、再び閻浮提に下生して

成仏する。よって弥勒の浄土は「五十六億万歳」を経てこの世に現出するのである。

一般にこの弥勒信仰は、「もう一つの浄土教」などと称して阿弥陀仏の浄土教と対比される。しかし阿弥陀仏の浄土教では、この世を穢土と為して厭離し、西方の浄土を欣求する。この人間世界（閻浮提）を肯定するか、否定するかで弥勒と弥陀の両浄土教は根本的に相違する。しかるに仏教史上では、両者は屢々対比されて、その優劣・往生の難易が論究されてきた。それは弥勒信仰に於いて、将来この閻浮提に現出するであろう地上の浄土とともに弥勒の住する兜率天を天上の浄土として設定することに起因する。この二つの浄土は、弥勒信仰を、兜率天への往生を願う「上生信仰」と、将来に於いて弥勒仏の龍華三会に値遇することを願う「下生信仰」とに両分する。そこで上方の兜率天への往生を願う上生信仰は、異土への往生という点で阿弥陀仏の浄土教と対峙する。ところがこの兜率往生説は、多数の弥勒経典に等しく説かれている訳ではなく、ただ沮渠京声訳の『上生経』にのみ説かれている。そこで是非とも『上生経』に関する考察が必要となる。

中国仏教においては弥勒と弥陀との浄土に関する議論が屢々繰り返された。まず吉蔵（五四九〜六二三）は『観無量寿経疏』等において「弥勒経」と「観無量寿経」とを比較検討している。彼のいう「弥勒経」とは『下生経』のことであり、「観無量寿経」所説の西方の弥陀浄土と当来の弥勒の浄土、即ち閻浮提の地上の浄土とを論じているのである。将来、閻浮提に出現するであろうところの浄土こそが弥勒信仰の主流であり、その点で吉蔵の見解は当を得たものである。その後、道綽（五六一〜六四五）は『安樂集』に、兜率天と西方浄土との優劣を論じ「少分似同、坳体大

別」と述べ、四義を挙げて弥陀の浄土の優位を明かしている。また智儼(六〇二)六八)は『孔目章』に、西方は異界、兜率は同界であり、従って西方浄土への往生は難行であると論じている。

更に『諸経要集』によれば、玄奘(六〇二)六四)が、兜率天は欲界内にあり、その往生は易行であるのに対し、西方浄土往生説は別時意であると断じたという。その俊足の窮基(六三二)八二)も亦、『弥勒往生経疏』において「願生極樂世界」の説は別時意となし、兜率往生を是としている(しかし、窮基撰として伝わる『西方要決』や『阿弥陀経通贊疏』では「浄土十勝、天宮十劣」と断定し、『上生経疏』と全く異なる結論を下している)。しかるに道綽の流れを汲む迦才は、『浄土論』に西方・兜率の優劣に關して十義を挙げて詳論し「西方大優、兜率極劣」となし、往生の方法に關して七義を以て「往西方者易、上兜率者難」と論断している。更に懷感は『釈浄土群疑論』に「前徳」即ち迦才の「浄土之論」を継承しつつ、より精密に論述しているが、その結論は迦才に等しい。また新羅の元曉(六一七)八六)の『遊心安樂道』(眞偽未定、憬興の『無量寿経連義述文贊』等にもそれぞれ教義を挙げて兜率天と西方浄土に關する議論を展開している。

吉藏の場合、前述の如く『下生経』によって弥勒の浄土を論じており、決して『上生経』を念頭に置くものではない。しかし、道綽已下の諸師は、吉藏とは相違して『上生経』を拠り所として弥勒の浄土を考察しているのである。『上生経』によって、兜率を以て弥勒の浄土となすという考え方は実に道綽に始まるのである。しかるに何故に道綽は、『観無量寿経』と『上生経』とを比較して論ずるようになったのであろうか。勿論、それには現実の弥勒上生信仰者の存在を看過することは出来ないが、『観無量寿

経』の学者である道綽は、『上生経』即ち『観弥勒菩薩上生兜率天経』を『観無量寿経』と同じく観想を説く經典と見たのであろう。実際に『観無量寿経』と『上生経』とは、その説相が極めて類似する。その一部を示せば次の如くである。

『観弥勒菩薩上生兜率天経』
(1) 兜率陀天上乃有如是極妙樂事

『観無量寿経』
彼国土極妙樂事

(2) 吹動此樹、樹相相触、演說空無常無我諸波羅蜜

尋樹上下、其声微妙、演說空無常無我諸波羅蜜

(3) 一蓮華百宝所成、一一宝出百億光明

蓮華一一葉作百宝色、……一脈有八万四千光

(4) 宝幢……化成無量樂器、懸処空中、不鼓自鳴

又有樂器、懸処虚空、如天宝幢、不鼓自鳴

(5) 欲為弥勒作弟子者、当作是觀、作是觀者、……一思想、作此想時、不得雜觀、皆一觀之……作是觀者、名為正觀、若他觀者、名為邪觀

欲念彼仏者、当先作此妙花座想、作此想時、不得雜觀、皆一觀之……作是觀者、名為正觀、若他觀者、名為邪觀

者、名為邪觀
(6) 称弥勒名、此人除却千二百劫生死之罪

称南無阿弥陀仏、称仏名故、除五十億劫生死之罪

(7) 命終之後、譬如壯士屈申臂頃即得往生兜率陀天

尋即命終、譬如壯士屈申臂頃即得往生西方極樂世界

(8) 此人命終時、弥勒菩薩放眉間白毫大人相光、与諸天人雨曼陀羅花、来迎此人

行此行者命欲終時、阿弥陀仏与觀世音及大勢至無量大眾、……今来迎接汝

右の經文は、兩經の類似の一端であるが、これは『觀無量壽經』の學者道綽としては決して看過することの出来ない問題であり、やがて、兩經の比較研究へと進展する。

ところで阿彌陀仏の淨土が法藏比丘の因位の修行によって建設された報土であるのに対して、兜率天は一生補処の菩薩の住処ではあるが、それは菩薩自らが建立するものではない。そのことは『上生經』に「爾時兜率陀天上、有五百萬億天子、一天子皆修甚深檀波羅蜜、為供養一生補處菩薩故、以天福力造作宮殿」と説き、兜率天の莊嚴が、一生補處の菩薩を迎え、供養する為に、天子が造作したものであることを明かしている。これに対して『觀無量壽經』ではその淨土の莊嚴を「是本法藏比丘願力所成」と説いている。右の如き類似にもかかわらず、両者は根本的などころで決定的な相違を示しているのである。『上生經』には確かに兜率天への往生や來迎を説いているのであるが、果して兜率が淨土と言えるのかはなほだ疑問となる。又、兜率への往生者が天上で如何に在るかといえ、そこで成仏や成仏の記別を受けるのではなく、天上の「上妙快樂」を得、「天女の侍御を得」という。しかも、その兜率往生が万人に等しく決定している訳でもなく、「設不生天、未來世中龍花菩提樹下亦得值遇」と説かれており、兜率天への往生の不可なる者をも仮定しているのである。さらに經の最後に、仏がこの『上生終』を説き終えたとき、「八萬億諸天發菩提心、皆願隨從彌勒下生」と述べており、ここでは兜率往生を究極目的とはせず、將來の閻浮提に於ける三會值遇をもって究竟となしているのである。

要するに『上生經』は一般に言われるように無條件に兜率往生を勧めているものではない。『上生經』が『下生經』の影響を受けて成立したものであることは、經中の「如彌勒下生經説」の語によって明らかであるが、先行の『下生經』等には一般道俗の兜率往生や來迎については全く説いていないばかりか、兜率天等への「生天」も否定して「設復生天來、會亦歸磨滅」(『成仏經』)といひ、また「汝等今者不以生天樂故、亦復不為今世樂故、來至我所、但為涅槃常樂因緣」(『下生經』)と説いている。そこで多少とも兜率天への往生について言及する『上生經』は、彌勒經典の中では全く特異な存在である。それはこの經の成立の事情と密接に関係するであろう。この經にはさまざまな經文を集成したものであることを推測せしめる個所もあるが、恐らく『下生經』等の彌勒經典を基礎とし、『觀無量壽經』等の觀想を説く經典と密接な関りを有しながら成立したものであろう。この『上生經』は觀法を説くもので、その兜率往生の根本經典と見られるようになつたのは、『下生經』等が悠久の未來の三會值遇を説くのみで、直ちに現在の救済に應えられなかつたので、『上生經』を手掛りとして直接に兜率天に上生しようという信仰が生ずるに至つたためである。この經は未來の救済を説く『下生經』の欠を補う意味から現在の救済として兜率往生を明かすことを目的に成立したものではなかつたが、結果的には從來の彌勒經典にない兜率上生信仰を生み出すこととなつたのである。